

今後の米・英の姿勢をにらむ＝米FOMC議事要旨&英CPI

2026年8月17日(月)

世界的にサマーバケーションシーズンであり、取引はやや低調となっています。
今週はそれほど目立った米指標の発表予定もなく、市場はウォーシュFRB議長が基調講演を実施する27～29日のカンザスシティ連銀主催シンポジウム「ジャクソンホール会議」に向かっています。

そうした中、今週ある程度注目を集めているのが、19日(日本時間20日午前3時)発表の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨(7月28・29日開催分)です。今年5月22日に就任したウォーシュFRB議長は、就任後初となった6月のFOMCで発表時の声明からフォワードガイダンスを削除。今後もフォワードガイダンスを示さない方針を示し、実際7月のFOMCでの声明もガイダンスを省いた簡素なものとなりました。声明文自体も6月とほぼ同じでした。主な違いは、据え置き決定が6月は全会一致、7月は9対3であったことを示した部分と、潤沢な準備預金を維持するという方針について、6月の「再確認する」から7月の「継続する」への表現変更、そして7月の声明で3名の反対者の氏名と0.25%の利上げ主張であったことを示した部分となっています。前職のパウエル議長時代の声明と比べると分量も3分の1程度となっています。

こうした中、マーケットではFRBの姿勢を知る手段として議事要旨をより重要視しています。前回6月のFOMC議事要旨では、結果的には全会一致となった同会合において、数人の参加者が金利を引き上げる根拠が既に存在すると主張していたことが判明。また、「参加者は総じて、会合間の期間に受け取った情報が、物価安定に対する上振れリスクが依然として高い一方で、最大雇用の達成に対する下振れリスクが幾分緩和したことを示唆していると判断した」と示しました。これらを受けて市場ではFRB内のタカ派姿勢が印象付けられています。

今回議事要旨が示される7月のFOMCでは、利上げを主張して反対した委員が3名出ました。同じ方向(今回はタカ派方向)での反対3名は2016年9月のFOMC以来約10年ぶりとなります。ウォーシュ議長は記者会見での質疑応答で3名の利上げ主張について質問を受け、「利上げを焦るのではなく、収集したデータを見極め、検証するプロセスが必要」と説明しました。また、タカ派的な意見も出た会合での議論について「仲の良い家族喧嘩」と評しています。

今回の議事要旨でタカ派姿勢がより強調されるようだと、ドル高が強まる可能性があります。短期金利市場の動きから算出した次回9月のFOMCでの利上げ期待は、7月28・29日のFOMC前までほぼ100%となっていました。ウォーシュ議長のデータを見極める姿勢を受けて70%台へ低下。さらに7日の米雇用統計で非農業部門雇用者数が予想外の前月比マイナス、平均時給の伸びが予想外に鈍化、労働参加率が2021年2月以来の低水準など、サプライズなほどの弱さを示したことで40%台まで低下し、据え置き見通しが過半数を超えてきています。こうした状況が議事要旨を受けてどこまで変化するかが注目されます。

米国以外の材料としては19日15時の7月の英物価統計があります。中でもインフレターゲットの対象である消費者物価指数(CPI)前年比に注目が集まります。

前回6月の英CPIは前年比+2.6%と5月の+2.8%から鈍化。市場予想の+2.7%も下回りました。ガソリンを含む輸送燃料の前年比が+5.7%と5月の+6.8%から大きく鈍化し、全体を押し下げました。食品・飲料(酒類除く)も+1.7%と5月の+2.2%から大きく鈍化しており、生活必需品を中心とした下げが見られました。ただ、賃金動向など国内要因が主体となることから中銀の注目度が高いサービスインフレは前年比+3.6%と5月の+3.7%から小幅鈍化に留まり、高い水準を維持しています。

13日に発表された英第2四半期GDPは、前期比+0.4%(年率換算+1.7%)と市場予想通りながら第1四半期の+0.6%(年率換算+2.5%)から伸びが鈍化しました。もっとも同時に発表された6月の月次GDPは前月比+0.3%と市場予想の前月比横ばいを上回る成長。四半期ベースでも、G7でトップの伸びとなっており、堅調な成長を見せています。この結果を受けて英中銀金融政策会合の委員でもあるビル英中銀チーフエコノミストは、利上げを後押しするものだと姿勢をメディアに向けて示しています。

英中銀は7月30日の金融政策会合で5会合連続となる据え置きを決定しました。ただ、投票は6対3と3名が利上げに投票しており、利上げに向けた流れが見られます。市場では年内の利上げをほぼ100%織り込んでいますが、次回9月の会合での利上げについては、短期金利市場での織り込みが17%程度と、据え置き見通しが優勢となっています。ただ、今回の英物価統計次第では9月利上げの可能性が高まり、ポンド高につながる可能性があります。

7月のCPIの市場予想は前年比+3.0%と、一気の反発を見せ、中銀のインフレターゲットの許容幅(ターゲットである+2.0%の上下1%、+1.0%～+3.0%)の上限に達する見込みとなっています。市場予想を上回り、許容幅を超える水準まで乗せた場合や、サービスインフレの上昇が見られた場合は、9月の利上げ期待が強まり、ポンド高となる可能性があると考えられます。

ここに掲載されている情報は、情報提供を目的としたものであり、特定の商品などの投資の勧誘を目的としたものではありません。

最終的な投資判断は、お客様ご自身の判断と責任によつてなされ、この情報に基づいて被ったいかなる損害についても「株式会社ミスカブソリューションサービス」では責任を一切負いかねます。「株式会社ミスカブソリューションサービス」は、信頼できる情報をもとに情報を作成しておりますが、正確性や完全性について責任を負いません。ここに掲載されている情報は、作成時点のものであり、市場環境等の変化などによって予告なく変更または廃止されることがあります。ここに掲載されている情報の著作権は、株式会社ミスカブ・ジ・インフォノイドに帰属し、株式会社ミスカブ・ジ・インフォノイドの許可無しに転用、複製、複写はできません。株式会社ミスカブ・ジ・インフォノイド